The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	岐阜方言の原因・理由に表れるモンデ
Author(s)	小田, 佐智子
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2016, 14, p. 67-75
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55611
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第 14 号（2016 年 3 月）67-75

岐阜方言の原因・理由に表れるモンデ

小田　佐智子

【キーワード】岐阜方言、原因・理由表現、デ、モンデ

【要旨】

本稿では岐阜方言における原因・理由表現にみられるモンデを取り上げ、その形式的特徴と意味的特徴を記述した。モンデの特徴をまとめると以下のようになる。

（1）モンデは、従属節に推量や当然性判断など、話し手の確信の度合いが強いモダリティを取ることはできず（§2.2）、主節は叙述文または依頼とのみ共起することができる（§2.3）。

（2）モンデの基本的意味は、「話し手の主観によって事態の判断や主張を述べるものではなく、話し手の主観から切り離した事態の因果関係を説明するもの」である。（§3.1）

（3）モンデは、話し手の意識の外で生じた事態の原因・理由を述べる形式であるため、話し手の意識や意志が介在していないことを押し出したいような言い訳や弁明、偶発的な出来事に対する弁明の場面において使用されやすい（§3.2）。

1.　はじめに

岐阜県を含む中部地方の広い範囲では、いわゆる原因・理由を表す接続助詞に（1）のようにデが多く用いられる。このデは、標準語の「から」「ので」に相当する接続助詞である。

（1）時間が足りんかった｛から／ので／デ｝、テストが最後までできんかった。

さらに岐阜方言の原因･理由表現には､デ以外にもモンデという形式が使用されており、このモンデとデは（2）のように置換可能である場合が多い。

（2）昨日から歯が痛む｛デ／モンデ｝、歯医者行ってくる。

中部地方を中心にみられるモンデについて彦坂（1991）では、「モン」という形式名詞によって理由部分を客観的に提示する気味を強めるものと指摘する。山田（2002）は、モンデは出来事の原因・理由を表す用法を持つこと、いわゆる理由を表さない用法にはモンデは使用できないことを明らかにしている。しかし、筆者の内省では理由を表さない用法でもモンデが適格になると判断ができる場合がある。判断にずれが生じる理由として、山田（2002）は、高年層を対象とした談話資料を軸にした分析を行っているということが考えられる。

また、モンデは前件が後件に従属するのではなく、前件と後件の出来事が時間的に前後して起きたという継起関係を表すマーカーとしての働きを持っているのではないかと述べられているが、それ以外の具体的な用法についての検討がなされていない。

先行研究においてもモンデの形式的特徴やデとの異同、意味用法の記述などは薄いように思われる。いずれもモンデとデについては､置き換えが可能であると述べられているが、

置換した場合に生じるニュアンスの違いなどの記述もほとんどない。そこで本稿では、岐阜方言のモンデを取り上げ、筆者[1] の内省に基づきその意味、用法を中心に記述することを試みる。

以下、§2 ではモンデの形式的特徴について整理し、§3 ではモンデの用法についてまとめる。§4 をまとめとする。

2.　形式的特徴

まずモンデの形式的特徴について述べる。§2.1 では、接続についてのべる。§2.2 で、従属節の、§2.3 では主節のモダリティタイプについて述べる。§2.4 では焦点化の可否の感手なら分析し、§2.5 では、文末用法について述べ、§2.6 を本節のまとめとする。

2.1.　接続

以下では、デ、モンデの接続について見ていく。デ、モンデのいずれも終止形接続である。

(3) 子どもに熱がある｛デ／モンデ｝、病院へ連れて行く。　【動詞】

(4) 寒い｛デ／モンデ｝、池の水が凍っている。　【イ形容詞】

(5) テストは簡単だ｛デ／モンデ｝、すぐ終わる。　【ナ形容詞】

(6) 母が入院中だ｛デ／モンデ｝、代わって家事をする。　【名詞】

しかし、モンデは終止形だけではなく連体形接続も可能であるという点でデとの異同が見られる。

(5') テストは簡単な｛*デ／モンデ｝、すぐ終わる。　【ナ形容詞】

(6') 母が入院中な｛*デ／モンデ｝、代わって家事をする。　【名詞】

モンデは連体形接続が可能であるという点から、形式名詞モノの名詞性を残していると考えられる。

2.2.　従属節内のモダリティ

次に従属節内のモダリティ形式との共起関係についてである。デとモンデの従属節内のモダリティは、(7)、(8) のように、可能性判断や伝聞などの認識的モダリティには共起制限はない。(9)、(10) のように聞き手に対する発話態度、伝達態度を表すモダリティにも、モンデは使用可能である。また (11) のような丁寧体にもデ、モンデが共起できる。

(7) 雨が降るかもしれん｛デ／モンデ｝、早めに帰る。　【可能性判断】

(8) 彼も行くらしい｛デ／モンデ｝、私も行くわ。　【伝聞】

(9) 留学したい｛デ／モンデ｝、貯金を始める。　【希望】

(10) 東京に行くつもりや｛デ／モンデ｝、ついでに横浜に行く。　【意志】

---

1)　筆者の居住歴は以下の通りである。1985 年生まれ。0-18 歳：岐阜県養老町→18-22 歳：京都市→22-24 歳：岐阜県養老町→24 -25 歳：大阪府豊中市→25-27 歳：タイ→27 歳-現在：大阪市。

（11）急いでおります｛デ／モンデ｝、これで失礼します。　【丁寧】[2)]

しかし、推量や当然性判断など話し手の知識、経験に基づく考えや判断を表すモダリティの場合には、モンデは共起できず、デのみしか使うことができない。

（12）明日は寒いだろう｛デ／*モンデ｝、コートを用意する。　【推量】

（13）彼は絶対来るはずや｛デ／*モンデ｝、信じて待つ。　【当然性判断】

推量や当然性判断のモダリティは、（7）、（8）の可能性判断や伝聞と同じく、認識的モダリティに当てはまる。これらのモダリティは、命題の真偽や事実性に対する話し手の態度に関わるものであり、（12）の「だろう」、（13）の「はずだ」は、話し手の知識や経験に基づいた考えや判断の確信の度合いが強く表れる。それに対して、可能性判断や伝聞は、話し手の確信の度合いは弱く、自らの直接経験や知識に基づいた情報判断ではないと言うニュアンスを含むものである。このことから、モンデが生起できる従属節のモダリティタイプは、命題に対する話し手の態度、判断が強く表れるものとは共起しにくいということが指摘できる。

2.3.　主節のモダリティ

モンデは認識的モダリティ、聞き手に対する働きかけのモダリティが主節にある場合、生起できない。

（14）朝から何も食べとらん｛デ／モンデ｝、お腹すいた。　【叙述】

（15）荷物は昨日出した｛デ／*モンデ｝、もう届いとるやろう。　【推量】

（16）車庫に車がある｛デ／*モンデ｝、帰ってきとるに違いない。　【証拠性判断】

（17）夜道は暗い｛デ／*モンデ｝、一緒に帰ろう。　【勧誘】

（18）危ない｛デ／*モンデ｝、それに触るな。　【禁止】

（19）うるさい｛デ／*モンデ｝、静かにしろ。　【命令】

（20）野菜たくさんとれた｛デ／モンデ｝、お隣に持ってって。　【依頼】

モンデは、話し手の判断を示すモダリティを許容しない。そして、働きかけのモダリティである勧誘、命令、禁止でも用いることはできない[3)]。ただし、働きかけのモダリティの中でも（20）の依頼ではモンデが許容される。働きかけのモダリティは命令や依頼などの意味が連鎖しているものである。例えば命令は、聞き手にその行為の実行を強制するのに対して、依頼は聞き手に対する強制が欠けているだけであり、あくまで行為実行の決定権は聞き手にある。働きかけのモダリティの中で依頼がモンデと結びつきやすいのか、またデとモンデの運用上の違いについては、§3.2.1 の意味用法のところで詳しく述べたい。

2）　丁寧体へ接続するデ、モンデは、筆者の世代ではほとんど使用されず、一、二世代上の層が使用するように感じられる。(11)の場合、筆者は「ので」を選択することが多い。

3）　山田（2002）が岐阜大学の大学生を対象に行った調査では、推量や勧誘の働きかけのモダリティでもモンデが許容されやすい傾向が示されている。しかし、25 名の調査者の中でも「自然」と回答した数が半数、残りの半数が「不自然だが許容」「不自然」と回答しており、母語話者の中でも非常に揺れが大きい。

2.4.　焦点化の可否

次に、従属節の焦点化の可否から考える。焦点とは、文中において最も重要な情報を担う要素を表すものであり、例えば、主節に「のだ」が置かれるような（21）の場合、「風邪をひいた」理由として挙げられる「手洗いうがいをしない」という事態に焦点化される。

（21）ちゃんと手洗いうがいをしないから、風邪ひいたんや。

文の焦点になっているというということは，文中において最も重要な内容は、主節（風邪をひいた）ではなく、従属節（手洗いうがいをしない）の内容のであることがわかる。しかし(21)のように、「のだ」によって焦点化される場合にはモンデは生起できない(21’)。

（21’）ちゃんと手洗いうがいをしない｛デ／*モンデ｝、風邪ひいたんや。

主節に「のだ」を置くとモンデが生起できないということは、「のだ」による従属節の焦点化ができないということである。このような焦点化の問題について、今尾（1991）は、原因・理由における焦点化の可否について 6 つの観点から判断している。

A. 強意の副助詞「こそ」の付加
B. 強意の終助詞「よ」の付加
C. 疑問の終助詞「か」の付加
D. 疑似分裂文の変形
E. 「だ」による代用省略
F. 埋め込み文における主節

A～F の観点からモンデとデの焦点化の可否についてみてみると以下のようになる。

（22）寒いときに冷たいアイスを食べる｛デ／*モンデ｝こそ、おいしいんや。【A】
（23）風邪ひいた？そんな寒い格好しとる｛デ／*モンデ｝よ。【B】
（24）なんで怒っとるの？一人でお菓子食べてまった｛デ／*モンデ｝か？【C】
（25）遅刻したのは電車が遅れた｛デ／*モンデ｝だ。【D】
（26）雪が降った｛デ／モンデ｝、電車が遅れた。
（26’）雪が降った｛デ／*モンデ｝だ。【E】
（27）彼と全然連絡が取れんかった。携帯電話を忘れた｛デ／モンデ｝と言った。【F】

今尾（1991）の判断基準に照らし合わせると、デは従属節の P（原因・理由）が焦点となる読みが可能であるのに対し、モンデはそれができないことが指摘できる。このことから、デは、P が Q（結果）を引き起こしたという誘因的な関係であると、論理のつながりがあることを示す場合に使用できるのに対し、モンデは、P と Q の誘因的な関係は希薄であり、論理的つながりを聞き手に強く示す必要がない場合に用いられる。この点については山田（2002）が指摘するように、モンデは、積極的に原因・理由を表すのではなく、P という事態に続いて起こった Q について述べる継起関係を表すマーカーとしての働きが強いという考えを指示するものだと言える。

2.5.　文末用法

文末用法とは、倒置、あるいは主節の省略によって接続辞で文が終了する用法である。（28）のように従属節と主節が倒置した位置にある場合、デ、モンデのいずれも使用でき

る。しかし、(29) のように原因・理由を表しているとは考えられない終助詞的用法においては、モンデは用いられない。

(28) A：C ちゃん、結婚したんやって。
B：知らんかった。最近あの子と全然連絡取っとらん｛デ／モンデ｝。 【倒置】
(29) あんたのことは絶対に忘れん｛デ／*モンデ｝。 【終助詞的用法】

2.6. 形式的特徴のまとめ

モンデの形式的特徴をデと比較しながら分析した。その結果、モンデの形式的特徴として、以下の点が指摘できる。

a) モンデは連体形接続の形でも接続できる点（§2.1）
b) 従属節に「推量」や「当然性判断」などの話し手の確信度が高い認識的モダリティ
をとることができない（§2.2）
c) 原則的に主節には認識的モダリティ、働きかけモダリティはとれないが、「依頼」のモダリティは許容される（§2.3）
d) 主節に「のだ」を置くことができず、従属節の焦点化ができない（§2.4）
e) 終助詞的用法はない（§2.5）

3. モンデの意味的・機能的特徴

次にモンデの意味・用法について述べてゆく。まず、§3.1 では、モンデがどのような原因・理由の用法を担っているか、方言文法研究会（2007）の原因・理由表現の用法を参考に、標準語の基本的用法と対比させながら基本的用法を大まかに把握する。さらに§3.2 では、モンデが用いられる語用的特徴について述べる。

3.1. デ・モンデの基本的用法

まず、方言文法研究会（2007）の原因・理由表現の用法と照らし合わせ、デ、モンデの基本的用法を確認する。

(30) 毎日雨が降る｛デ／モンデ｝、洗濯物が乾かん。 【事態の原因】
(31) 体調が悪い｛デ／モンデ｝、旅行には行かんことにした。 【行為の理由】
(32) あの人は左手薬指に指輪はめとる｛デ／*モンデ｝、既婚者だ。 【判断の根拠】
(33) 風邪をひくといかん｛デ／*モンデ｝、厚着して出かけなさい。 【発言の根拠】
(34) 近場でいい｛デ／*モンデ｝、旅行連れてって。 【理由を表さない用法】

§2 で述べた通り、モンデはデに比べモダリティ制約が強く、主節が叙述文、または依頼表現でなければ生起できない。そのため、聞き手に対する働きかけや話し手の意志などの発言や態度を示し、発言、態度の根拠を表す（33）の発言の根拠の用法にはモンデは使用できない。(30) の事態の原因は、主節が具体的な事実・事態を表し、従属節が主節の事態そのものを引き起こす原因・理由を表す場合である。この場合、デとモンデに意味的な

違いは認められない。(31) の行為の理由は、基本的に、主節に話し手の意志的な行為や聞き手に対する働きかけが現れ、その行為を行う理由が示される用法である。先に述べた通り、モンデはデに比べ、モダリティ制約が強いため、主節に働きかけのモダリティをとることは難しいが、モダリティ要素がない叙述文では行為の理由を述べることは可能である。叙述文が可能である理由は、ある行為の理由を客観的に述べるものだからであろう。行為の理由の用法でも、(30) の事態の原因と同じく、叙述文においてはデとモンデに意味的違いは認められず、置換可能な関係にある。

しかし、叙述文であってもモンデが使用しにくい用法がある。それが (32) の判断の根拠と (34) の理由を表さない用法である。(32) の判断の根拠の用法は、従属節に示される事態が主節の判断の根拠を表すものである。この用法では、知識や経験に裏付けされた根拠が従属節で述べられ、主節の事態の確信度が高いことを含意している。モンデは、「だろう」や「違いない」など、話し手の確信度が高いモダリティとは共起しにくい。その理由の一つには、やはりモンデは理由の妥当性が高く、話し手の確信の度合いが高いことを表さない性格だからであろう。

次に、理由を表さない用法についてである。理由を表さない用法は、「前件は後件を聞き手が実行に移すのを可能にしたり、促進したりする情報として提示される(白川 1995:212)」ものであるとし、「主節でいわれること (命令・依頼・勧誘等) をすんなり行動に移すために相手が承知していなければならない (と話し手が考える) 状況についての前提的な知識 (白川 1995:254)」を導入として背景の説明をする用法である。(34) の例は、話し手が聞き手に「旅行に連れて行く」ことを強く要望しており、聞き手が実行に移しやすいように「近場でいい」という妥協案を提示している。しかし、この発話では、話し手が、聞き手に要望を飲み込ませようという意志が強く表出しており、聞き手の選択余地の範囲が非常に狭くなっている。このような場合、モンデは使用できず、デが選択される。話し手の意志性に関わる問題は、§2 でも述べた通り、聞き手に対する働きかけのモダリティと共起しないという形式的特徴と結びつくものである。

以上のことから、モンデの基本的意味は、話し手の主観によって事態の判断や主張を述べるものではなく、話し手の主観から切り離した事態の因果関係を説明するものであると言える。それに対してデは、話し手の主観のかかわり方には一切影響されず、原因・理由表現として広い範囲を表すことができる。

3.2.　モンデの語用的特徴

モンデの基本的性格は、「話し手の主観的判断や主張を積極的に示さず、従属節と主節の事態の関係を説明すること」である。このような意味に連動し、モンデが使用される文は、依頼場面 (§3.2.1) や、言い訳・弁明 (§3.2.2)、偶然の想起 (§3.2.3) の語用的特徴が認められる。

3.2.1.　依頼に用いられるモンデ

まず、依頼場面に見られるモンデについて述べる。§2 で、モンデは働きかけのモダリ

ティにおいて、依頼のモダリティのみに生起できると述べた。では、なぜ依頼表現にのみモンデが許容されるのか。また、デを用いた場合と、どのような差異が生じるのか。下の例から考えてみたい。

（35）【毎日送り迎えをしてくれる母親に対して】

終電なくなってまった｛デ／モンデ｝、迎えに来て。

（36）【友人に対して】

終電なくなってまった｛?デ／モンデ｝、迎えに来て。

（35）、（36）でも場面は同じであるが、それぞれニュアンスが異なる。（35）のように習慣的に送り迎えをしている相手に対してはデ、モンデのどちらもが使用できるが、（36）のように、「迎えに来る」ことが習慣的ではない相手に依頼する場合には、デを使うと「私が連絡をしたら迎えに来るのが当たり前だ」というような含みを持ち、語用レベルで不自然になる。依頼は命令などに比べ、話し手の聞き手に対する働きかけの度合いは低い。つまり、聞き手側に要望の拒否する余地があるということである。モンデを使うと、「迎えに来てほしい」という話し手の要望に対して、聞き手に選択の余地があることが含意されるが、デの場合、選択の余地は感じられない。このような結果として、丁寧な依頼場面では、デを避け、モンデを選択することが多い。例えば（37）のような例である。

（37）すみません、この使い方がわからない｛??デ／モンデ｝、教えてもらえませんか。

それに対して、依頼場面でも、モンデではなく、デが好まれる場合もある。例えば、（38）のように緊急性や重要性が高いような場合ではモンデは不自然になる。

（38）骨が折れとる｛デ／??モンデ｝、救急車呼んで。

（39）堤防が決壊した｛デ／??モンデ｝、ここから避難してください。

（38）（39）のような緊急性や情報の重要性が高い場面でモンデを使うと、話し手が事態に対してあまり緊急性を感じておらず、かなり悠長に構えているという印象を受ける。「骨が折れている」「堤防が決壊した」という前件の事態が深刻であるならば、聞き手側の行動の選択肢は限定されることになる。モンデは従属節の状況を説明したうえで、聞き手に行動の選択の余地があることを含意するため、行動の選択肢が限定的になる緊急事態における場面では使用しにくいのである。

3.2.2.　言い訳・弁明

モンデは聞き手に向かって話し手自身の行動の言い訳や弁明をする場合にも用いられやすい。

（40）【夜遅くに帰宅してきたことを母親に咎められる】

母親：どうしてこんなに帰りが遅くなったの？

子ども：友達と遊んどった｛?デ／モンデ｝遅くなってまった。

（41）【レポートの提出期限に間に合わなかったとき】

バイトが忙しかった｛?デ／モンデ｝、レポートが間に合いませんでした。

話し手が自身にとって不都合な結果に対して、理由が正当性や必然性を持たないような場合モンデが使われる。デを使用すると、「このような事態を招いたのにはちゃんとした理

由がある」から後件の事態が結果として生じたのだと主張しているように感じられる。そのため、(40) と同じような場面でも、話し手が開き直っているような状況では、逆にモンデが不自然になる。

(42) 【夜遅くに帰宅してきたことを母親に咎められて】

子ども：うるさいな！友達と遊んどった｛デ／?モンデ｝、遅くなったの！

デを使用すると、話し手の意識や意志が出現するが、モンデの場合は話し手の意識は前面に出てこない。モンデは話し手が、「行動とその結果に対して自分自身は事態の中心にかかわっていない」、「自分の意志でこの結果を生み出したのではない」というニュアンスを含む。そのため、言い訳や弁明の場面に使用されやすい。

3.2.3.　偶然性・偶発性の想起

モンデは (43) (44) のように、予想外の事態や不本意な事態が生じた場合に用いられやすく、「うっかり」や「偶然」、「思わず」など偶然性や偶発性を表す表現と共起しやすい。

(43) 徹夜続きやった｛?デ／モンデ｝、うっかり電車の中で寝て、終点まで行ってまった。

(44) 子どもが全然言うこと聞かんかった｛?デ／モンデ｝、思わず怒鳴ってまった。

前件の事態が後件の結果を引き起こすこととは想定していない場合、デよりもモンデの方が自然である。デを用いると「子どもが全然言うことを聞かなかったから怒鳴った」となり、結果を導いた理由がより明確になり、「うっかり」や「つい」、「思わず」など偶然性を表す表現とは結びつきにくい。一方、モンデの場合、「怒鳴ってしまったのは、自分の感情がコントロールできない状態だったことによる非意志的な行動」というニュアンスが生じる。

3.3.　意味・用法まとめ

以上で述べたモンデの意味・用法についてまとめると以下のとおりである。

f) モンデの基本的意味は、話し手の主観によって事態の判断や主張を述べるものではなく、話し手の主観から切り離した事態の因果関係を説明するものである。(§3.1)

g) モンデは話し手の意志や判断が入り込む余地がないため、聞き手に行為の選択の余地ができる。そのため、依頼場面に用いられやすい。(§3.2.1)

h) 言い訳や弁明、偶然の想起など、話し手の意志や意識の存在を示さない場合に用いられやすい。(§3.2.2、§3.2.3)

4.　まとめ

以上、本稿では岐阜方言における原因・理由表現にみられるモンデを取り上げ、その形式的特徴と意味的特徴を記述した。モンデの特徴をまとめると以下のようになる。

(A) モンデは、従属節に推量や当然性判断など、話し手の確信の度合いが強いモダリティを取ることはできず (§2.2)、主節は叙述文または依頼とのみ共起するこ

とができる（§2.3）。

（B）モンデの基本的意味は、「話し手の主観によって事態の判断や主張を述べるものではなく、話し手の主観から切り離した事態の因果関係を説明するもの」である。（§3.1）

（C）モンデは、話し手の意識の外で生じた事態の原因・理由を述べる形式であるため、話し手の意識や意志が介在していないことを押し出したいような言い訳や弁明、偶発的な出来事に対する弁明の場面において使用されやすい（§3.2）。

モンデは岐阜方言に限らず、東海地方から北陸地方にかけて使用されている形式である。また、標準語の「もので」とも類似した点が多いことも事実である。標準語における「もので」や他の方言との対照も必要であろう。

また、岐阜方言の原因・理由表現にはデ、モンデ以外にもニやモンヤデがある。特にモンヤデはモンデと形式的に類似しているが、使用できる用法や場面はモンデよりもさらに限定的である。

（46）体調が悪い｛モンデ／モンヤデ｝、仕事には行けない。

（47）咳が出るし熱っぽい｛モンデ／*モンヤデ｝、風邪だと思う。

接続助詞のデ、モンデ、モンヤデの対応関係、さらに接続助詞から派生した接続詞ヤモンデについても本稿では触れていない。今後、本稿で触れていない接続助詞モンヤデや、接続詞ヤモンデについても分析考察を加えたい。

【参考文献】

今尾ゆき子（1991）「カラ、ノデ、タメ：その選択条件をめぐって」『日本語学』10-12，pp.78-89.

白川博之（1995）「理由を表さない『カラ』」仁田義雄編『複文の研究（上）』pp.189-219，くろしお出版.

彦坂佳宣（1991）「東海西部地方の原因・理由表現：愛知県方言の分布と歴史ノート（7）」『名古屋・方言研究会会報』8，pp.23-35.

方言文法研究会編（2007）『全国方言文法辞典《原因・理由表現編》』日本語諸方言の条件表現に関する対照研究 研究成果報告書.

前田直子（2009）『日本語の複文　条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版.

山田敏弘（2002）「美濃方言の原因・理由表現」方言文法研究会編『岐阜大学教育学部研究報告. 人文科学』51-1，pp.1-21.

————（2010）「岐阜県岐阜市方言の原因・理由表現」『方言文法研究会編 2010 全国方言文法辞典資料集(1)原因・理由表現』pp. 63-68，科学研究費補助金研究成果報告書.

おだ　さちこ（大阪大学大学院生）

sachiko527@hotmail.co.jp